

## 鹿児島県水土里サークル活動シンポジウム 県内の活動組織から1,500名が参加



宮路会長 開会の挨拶

本会に事務局を置く鹿児島県水土里サークル活動支援協議会は、9月1日、鹿児島市の宝山ホールにおいて、鹿児島県水土里サークル活動シンポジウムを、鹿児島県との共催により開催した。

本シンポジウムは、水土里サークル活動の関係者が一堂に会し、活動組織の意識向上と、活動のさらなる充実強化を図り、共同活動を契機に地域づくりへの発展に資することを目的に開催している。本県では、41市町村の731組織が、総面積約4万haで、この活動に取り組んでいる（平成27年度末現在）。

はじめに、県水土里サークル活動支援協議会の宮路高光会長（日置市長）が参加へのお礼を述べ、「水土里サークル活動では、地域ぐるみで、農地や農業用施設等の保全管理をしていただき、耕作放棄地の減少につながっているが、この取り組みは農村地域を守る活動でもある。毎年、この活動の予算を確実に確保していただくため、農林水産省や関係省庁、国会議員の皆さまへお願いをしているところだが、今後も皆さんの活動が継続できるよう要望していきたい。本日の講演や事例発表を参考に、皆さんの地域でさらなる活動の充実と地域づくりの発展につなげてほしい」と挨拶した。

続いて、県農政部の川野敏彦部長が、日頃の取り組みに感謝を述べ、「農家の方たちが安心して営農できるよう、県としても働きかけていきたい。多面的機能の維持は、国の農業政策を



川野農政部長 開会の挨拶

推進する上でも重要なもの。水土里サークル活動を通して地域で話し合いが持たれ、それが農村地域の活性化につながる。各組織での活躍を期待している」と挨拶した。

鹿児島県議会議員36名で構成されるかごしま農業農村整備・水土里の会の堀之内芳平会長は、水土里の会の活動を紹介し、「県議会では、水土里サークル活動に取り組む地域の現地調査や意見交換を重ね、この活動が多面的機能の維持・発揮、農村の活性化につながる重要な施策だと認識している。今後も、県議会としても支援に努めてまいりたい」と来賓挨拶を述べた。水土里の会からは、10名の県議会議員が参加した。



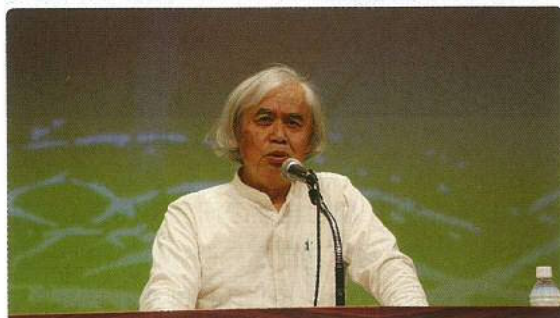
水土里の会 堀之内会長による来賓挨拶

その後、百姓・農と自然の研究所代表の宇根豊氏が「人間はなぜ、自然にひかれるのか～農とは、一体何なのか。新しい農業観をもとめて～」をテーマに講演した。

宇根氏は、「田んぼで赤とんぼが飛んでいる価値を考えたことはあるか。その風景に人々は癒やされ、田んぼは多面的機能を発揮するものの、その価値を理論づけて考える百姓は少ない。赤とんぼを見つめるまなざしは大切。赤とんぼが育つのは、毎年、百姓が田んぼで稲作を行っているからだ。百姓は農作物を育てるお金はもらすが、赤とんぼを育てるお金はもらってはいないし、多面的機能を発揮するためのお金を百姓に支払うべきだ」という議論もわいてはこない。しかし今や百姓も減り、これまでとは異なる価値観が必要なのでは。

農業は資本主義の価値観とはあわない。ヨーロッパの農業政策は、価格政策のもつ所得を維持する効果と生産を刺激する効果の二つの効果を切り離し、直接的に農家の所得を補償する農業保護政策をとっている。EUで国境が撤廃され、安価な農作物が手に入るようになり、気づかされた。食べものは輸入できるが、風景は輸入できない。自然環境も風景も私たちの宝、国の財産だからと、ヨーロッパでは環境政策に税金を投じている。

百姓は、お金にならないものを引き受け過ぎている。日本人は、自然環境をあたりまえに思い過ぎている。農村風景は百姓が作り出しているが、日本の農業政策を見ると、中山間地域等直接支払や多面的機能支払があるものの、決して十分だとは言えない。百姓が本気で要請していかなければならない。資本主義から脱却した新たな農業観が必要なのではないか。そして、百姓がもつとがんばらないと。ともにごんばつていこう」と話した。



宇根氏による講演

続いて、鹿児島県地域振興公社が農地中間管理事業の活用について、県水土里サークル活動支援協議会が活動中の安全対策についての情報を提供した。

そして、参議院議員の進藤金日子氏が「農業農村整備事業及び多面的機能支払の情勢について」をテーマに、情勢を報告した。

進藤氏は、農地・水・環境保全向上対策事業の創設の背景や多面的機能支払制度の法制化までの経緯、同事業を巡るさまざまな議論等を紹介した。また、熊本地震で被災した水田の大半が、多面的機能支払交付金で復旧にあっており、災害等、不測の事態にこの交付金を使えることを覚えておいてほしいと、同制度の新たな活用の道を紹介した。

次に、農林水産省が7月より多面的機能支払交付金に関するメールマガジン「農村ふるさと保全通信」の配信を始めたことに触れ、地域活動の参考にしてほしいと述べた。また、農業分野では女性の視点が重要視されている。水土里サークル活動の活性化にも女性の視点を活かしたいので、ご意見を寄せてほしいと呼びかけた。



進藤金日子参議院議員による情勢報告

続いて、水土里サークル活動に取り組む3つの活動組織が事例を発表した。

はじめに、いちき串木野市広域協定運営委員会（池之上國義代表）から、いちき串木野市農政課の木場英朗さんが、広域協定運営委員会の活動状況等について説明した。

同委員会は、平成27年9月に、市内28の活動組織が合併し、旧串木野市と旧市来町を包括

した広域組織として設立された。同市では、市内の対象農用地の58%で水土里サークル活動に取り組んでいる。

木場さんは、「協定を結んだことで各活動組織の事務負担が軽減され、少ない面積でも積極的な活動の展開が可能となった。予算も柔軟に活用でき、執行管理も把握できるようになった。ホームページも開設し、情報を発信することで地域のPRにもつながっている。今後は民間企業や集落を巻き込んだ活動を展開していきたい」と述べた。



いちき串木野市広域協定運営委員会の事例発表



田布川（水・土・里）環境保全会の事例発表

続いて、枕崎市の田布川（水・土・里）環境保全会（沖園強代表）が事例を発表した。

同保全会は、平成24年度に自治会を中心に活動組織を立ち上げ、同年「ふるさと探検隊」を開催し、地域の課題を洗い出した。ピオトープの先進地研修や、農地中間管理事業による農地集積の勉強会の開催、20年近く続くコスモスの植栽、地域内外の人が訪れる鬼火焚き等の取り組みを紹介した。

また、集落営農組織のメンバーらが出資し、閉店した空き店舗で、生鮮品や日用品を販売する買い物弱者対策の取り組みも紹介した。「共同活動が地域の絆を育てている。地域を知り、愛してもらうことが大事。そして次世代のリーダー育成が鍵」と話した。

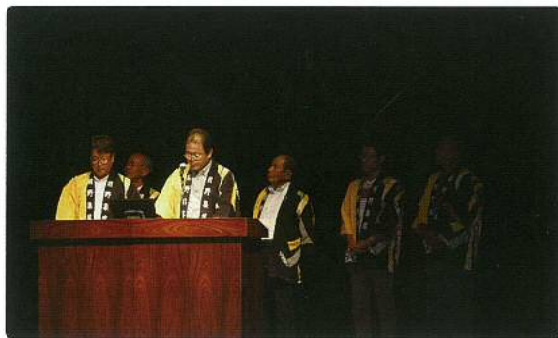
最後に、天城町のミチブシン前野（近田邦夫代表）が事例を発表した。

ミチブシン前野は、減反政策でなくなった田んぼの復活と田植え唄の継承、共同活動の事例、水土里サークル活動を通じて集落のまとまりが強まり、公民館周辺や展望台の整備まで活動が発展したこと等を紹介した。

そして「ユイの精神と先祖代々受け継がれてきた大地を、次世代を担う子どもたちへ受け継いでいきたい」と、抱負を述べた。

前野集落は、民謡日本一の子どもを2人も輩出した地域でもある。シンポジウムの締めくくりに、地元の小・中学生が島唄を披露した。子どもたちの伸びやかな声がホールに響き渡り、会場をわかせた。

シンポジウムにはおよそ1,500名が参加。活動のさらなる発展を決意し、閉会した。



ミチブシン前野の事例発表



島唄の披露